『三国志演義』における呂蒙像について

伊藤　晋太郎

はじめに

呂蒙（一七八～二一九）は三国の一、呉を建国した孫権配下の武将として、数々の戦いで功績を上げた。若い頃は武一辺倒であったが、孫権から読書を勧められた後は、知略にもすぐれた武将となり、周瑜・魯粛の後を継ぐほどの軍部の重鎮となった。特に荊州攻略戦において鮮やかに城を奪取したことや関羽を敗死に追い込んだことは有名である。

一方、蜀を建国した劉備と強い絆で結ばれた関羽は、その死後に神として崇拝され、宋以降の朝廷が絶え間なく爵位を追贈したことにより、関帝と呼ばれるようになった。明清期になると官民を問わず関帝信仰は最高潮を迎える。小説『三国志演義』（以下、『演義』）も関帝信仰の影響を大いに受けている。早い時期の『演義』の版本の中には関帝をはばかって関羽の死を描かないもの（関羽の死が描かれている葉をまるまる白紙とする）もあるほどである。(1)

それほどに関帝信仰の強い影響下にある『演義』は、関羽を死に追いやった呂蒙をどのように描くのか。これまでも崇

拝の対象であった関羽を殺す呂蒙は『演義』において悪玉として描かれるという言説はあったが、印象論に過ぎない嫌いがあった。そもそも、『演義』において圧倒的武勇を誇る関羽を死に追いやるほどであるから、呂蒙もそれなりの何かを持った人物でなければ釣り合わない。そこで本稿では、『演義』における呂蒙の描写を、『演義』以前の人物像や『演義』につけられた評語も含めて全面的に分析・検討する。具体的には、『演義』の呂蒙像を、正史『三国志』（以下、正史）における呂蒙関連の記述、および三国興亡の一部始終を扱った民間の三国故事としては『演義』の前段階にあたる『三国志平話』（以下、『平話』）の呂蒙像と比較することで、『演義』における呂蒙というキャラクターの形成のされ方を探りたい。そうすることで関羽の最大の敵といえる人物がどのようにしてその地位にふさわしいキャラクターを獲得したかが示され、『演義』における人物造形の一端を詳しく解明できよう。

尚、『演義』については毛宗崗本を使用する。毛宗崗本は『演義』の数ある版本の中でも普及本となった版本であるからというだけでなく、関帝信仰が最高潮に達した清代における改訂本であるため、そこに描かれる呂蒙像も関帝信仰の影響をより強く受けていると考えられるからである。また、毛宗崗本には関羽を『演義』の「三絶」の一人とする毛氏父子による批評も加えられており、これら評（以下、毛宗崗評）も呂蒙像の解明のために活用していきたい。

まず、『演義』の呂蒙像に関する先行研究を概観した後、正史・『平話』・『演義』の順にそれぞれの呂蒙描写を確認して、その人物像の特徴や『演義』の呂蒙描写の形成のされ方を分析する。また、毛宗崗評に見える呂蒙像についても検討する。最後に『演義』の関羽像との対比から、『演義』の呂蒙が何をもって関羽を打ち倒すにふさわしいキャラクターを獲得したかを明らかにしたい。

一、『三国志演義』の呂蒙像に関する先行研究

呂蒙は『演義』の主要登場人物ではないので、その人物像に関する研究は多くない。以下、発表順に先行研究を見ていき、これまでどのような指摘がなされてきたかを確認する。

趙永源「説呂蒙」[2]は先行研究の中で最も早く、かつ『演義』の呂蒙像に関する唯一の専論である。趙氏は、『演義』の作者が呂蒙を低く評価していたり、呂蒙の「義」を描きたくなかったりしたがために、正史呂蒙伝やその裴注に見える呂蒙の肯定的なエピソード――孫権の勧めによって学問に目覚めたこと、降参してきた武将から兵を奪い取ることを拒否したことなどを採用しなかったと指摘する。特に、史実とは違った悲惨な死に方に象徴されるように、史実に対する修正や取捨、また想像による虚構には、作者の感情的要素がしみ渡っていると述べる。そして、『演義』は呂蒙の「智」を強調するとし、『演義』が描く呂蒙の「智」を「疑」「詐」「精」「奇」「狠」に分類し、それぞれの具体例を挙げる。また、呂蒙が孫権に甘寧を推薦する場面と、曹操軍に囲まれた甘寧を救うよう周瑜に主張する場面とが相呼応していることに『演義』の筆の細かさが表れていることも指摘し、全体として『演義』の呂蒙像は成功しているという。一方、毛宗崗本は呂蒙をたたえる詩を削除するなど嘉靖壬午本よりも呂蒙を貶めているとする。

趙論文は、『演義』の呂蒙描写について比較的全面に渉って論じている点が評価できる。しかし、趙氏は孫権が一時は本拠としていた鎮江（当時は京）の地にある学校に勤務しているためか、呂蒙に対する思いが強過ぎて客観さ、冷静さに欠ける嫌いがある。また、関羽に敵対する人物としての呂蒙像という視点では書かれていない。

白盾「一時多少豪傑！――評《三国演義》東呉人物的描写」[3]は『演義』における周瑜・魯粛・呂蒙・陸遜の人物描写について論じたものである。呂蒙についてはその成長過程（所謂「呉下の阿蒙」のエピソード）を描かない一方、荊州攻略

戦の顚末については比較的詳細に描くことを指摘し、呂蒙による荊州攻略戦は初めから終わりまで「詐」という特徴を示しているとして、その具体例を挙げる。周瑜・魯粛に比べると、『演義』の呂蒙は本来の英雄としての姿が比較的正しく描き出されているという。いずれも趙論文と共通する見解である。また、『演義』が東呉の人物を描く時、蜀漢や蜀漢の利益と関係ない時には公正に描かれたり、事実に沿って描かれたりするが（孫策と太史慈の闘い、「苦肉の計」など）、蜀漢の人物と関係がある時には東呉の人物が引き立て役、蜀漢の人物を美化するための犠牲となっており、公正さが失われているとも指摘する。この点については、筆者もかつて『演義』の周瑜像を論じた時に指摘したことがある。(4)

沈伯俊「智勇双全的呂蒙」(5)は、『演義』には歴史上の呂蒙の活躍や知勇兼備の人物像がおおかた再現されていると指摘する。ただし、「忠義」の化身である関羽を死に至らしめたために関羽に祟られて死ぬという虚構が設けられたことについては、典型的な虚構による鬱憤晴らしであり、今日的な目線で見れば好ましくないとする。沈論文は大部分が歴史上の呂蒙について述べられており、『演義』の呂蒙像に関する言及は一部分にとどまる。

以上、『演義』の呂蒙像に関する先行研究を見てきた。先行研究では、『演義』における呂蒙の人物像は「智」や「詐」を特徴とすることが指摘され、周瑜や魯粛に比べれば、『演義』の呂蒙描写は成功しているとも評価される。呂蒙が学問に励んだことや呂蒙の「義」が『演義』において描かれないことは、『演義』の呂蒙に対する低い評価ゆえとする論考もあるが、近年明らかになりつつある『演義』の成立事情（後述）を踏まえれば、呂蒙評価と単純に結びつけるのは早計であろう。また、『演義』における呂蒙の死を当時神格化されていた関羽との関連で論じているものもあるが、関羽を死に追い込むことになる最大の敵という視点から『演義』の呂蒙像を研究した論考はまだない。よって、その視点から研究を進める余地は十分にあろう。

二、正史『三国志』における呂蒙

正史『三国志』において歴史上の呂蒙はどのように記載されているのか。呂蒙伝のみならず、正史全体の記載の中から裴注も含めて呂蒙に関するものを拾い上げ、彼の生涯をまとめる。(6)

呂蒙は字を子明といい、汝南郡富陂県の人である。呂蒙伝や『資治通鑑』巻六十八によれば、呂蒙は建安二十四年（二一九）に四十二歳で死去しているので、逆算すれば熹平七年（一七八。三月に光和と改元）の生まれということになる。

その後、江南に渡り、十五、六歳にして姉の夫で孫策の将だった鄧当の山越討伐につき従う。帰ると母に叱られるが、「虎穴を探らずして、どうして虎の子を得られようか（不探虎穴、安得虎子）」と言っている。呂蒙の性格を示す逸話である。鄧当の役人に呂蒙を侮辱する者がいたのでこれを殺すも、孫策に気に入られる。数年後に鄧当が死ぬと、張昭の推薦でその後を継ぎ、別部司馬となる（呂蒙伝）。

建安五年（二〇〇）、孫権が孫策の後を継ぐと、年若い部将が率いている兵数の少ない軍を統合しようとしたので、呂蒙は軍装を目立たせて整然とさせたところ、孫権は喜んで逆に呂蒙の兵を増やした（呂蒙伝）。呉主伝（孫権の伝）に、建安八年（二〇三）、「韓当・周泰・呂蒙らが政情不安定な県の令や長になった（韓當・周泰・呂蒙等爲劇縣令長）」とあるが、これは呂蒙伝に「丹楊郡征伐に従い、行く先々で功績を挙げたので、平北都尉・広徳県長を拝命した（從討丹楊、所向有功、拜平北都尉、領廣德長）」とあるのと同じ時のことと思われる。

建安十三年（二〇八）、呉に身を寄せた甘寧を周瑜と共に孫権に推薦している（甘寧伝）。この年の春には孫権の黄祖征伐に従い、敵の先鋒の都督・陳就を破ってその首を斬る。横野中郎将を拝命し、銭千万を賜る（呉主伝・呂蒙伝。淩統伝

にも関連記載あり)。そして周瑜・程普らと共に「赤壁の戦い」で曹操を破り、韓当らと共に南郡攻めに参加。夷陵で曹仁に囲まれた甘寧を救うための計を周瑜らに進言し、周瑜と共に甘寧を救う(呂蒙伝・韓当伝・周瑜伝・呉主伝・甘寧伝)。

また、呉に身を寄せた益州の襲粛の兵を周瑜が呂蒙に与えるよう上表したが、呂蒙は襲粛が「教化を慕って遠くから帰参したのだから、義に照らして兵を増やすのがよろしく奪うべきではない(慕化遠來、於義宜益不宜奪也)」と固辞。孫権は兵を襲粛に返した(呂蒙伝)。呂蒙が「義」を説く逸話である点は注目される。

建安十四年(二〇九)、呉が南郡を落とすと、偏将軍・尋陽県令を拝命している(呂蒙伝)。

建安十五年(二一〇)に周瑜が死去して魯粛がその職を引き継ぐと、呂蒙は関羽に対するための五策を提言。魯粛は呂蒙の才略を認め、呂蒙の母に拝して友情を結ぶ(呂蒙伝)。この記事の注に引く『江表伝』に有名な次のエピソードが見える。呂蒙は以前、孫権から学問を勧められると、熱心に読書し、老学者も及ばないほどになった。魯粛も呂蒙と議論して、「わしは大弟が武略のみの人と思っていたが、現在は、学識に優れ、もはや呉下の阿蒙ではない(吾謂大弟但有武略耳、至於今者、學識英博、非復呉下阿蒙)」とその進歩を評価したところ、呂蒙は、「士たるもの三日会わなければ、必ずさらに刮目して接すべきです(士別三日、即更刮目相待)」と応じた。

近くに駐屯していた成当・宋定・徐顧が死に、その子弟が幼かったので、孫権は三人の兵を呂蒙に与えようとしたが、呂蒙は三人の子弟のもとに留めるよう求める(呂蒙伝)。さきの襲粛降伏時のエピソードと類似する。皖で屯田していた魏の蘄春典農・謝奇に降服を勧めたが、従わないので襲撃。謝奇は退却し、その伍長の孫子才・宋豪らは呂蒙に降服した(呂蒙伝)。

建安十六年(二一一)、孫権が濡須で曹操と戦った際、呂蒙は蔣欽と諸軍を指揮する。しばしば奇計を進言したり、夾水口に塢を建てることを勧めたりして、曹操撃退に貢献した(呂蒙伝・呂蒙伝注引『呉録』・蔣欽伝)。

建安十九年（二一四）、孫権の皖親征に従って功績を挙げたので、廬江太守に任じられ、尋陽の屯田民等を与えられた（呂蒙伝・呂蒙伝注引『呉書』・甘寧伝）。また、孫権の命で廬陵の賊を平定する（呂蒙伝）。

建安二十年（二一五）、劉備が益州を取ったものの、長沙・零陵・桂陽の三郡を返さないので、孫権は呂蒙に三郡を取るよう命じる。淩統と三郡に向かい、長沙・桂陽は降参したが、零陵太守の郝普は降らなかったので、偽計を用いて降らせる。さらに、孫皎・潘璋と共に魯粛を助けて益陽で関羽を防ぐ。その結果、尋陽・陽新が奉邑として与えられた（魯粛伝・先主伝・呉主伝・呂蒙伝・淩統伝）。

呂蒙が設けた宴席で甘寧に父を殺された淩統が甘寧と不穏な空気になったので、呂蒙が身をもって二人の間に割って入った（甘寧伝注引『呉書』）。

呂蒙は孫権の合肥攻めに従い、撤退時に張遼から襲撃されると、淩統・甘寧と共にこれを防いだ（呂蒙伝・甘寧伝）。

建安二十二年（二一七）、呂蒙は濡須を防衛する指揮を任され、曹操軍を撃退する。左護軍・虎威将軍を拝す（呂蒙伝）。この年、魯粛が死去したので、呂蒙はその兵馬を引き継ぎ、漢昌太守を拝す。徐州を取るよりも関羽から荊州を奪うべきと孫権に献策していた呂蒙だが、当初は関羽と友好的に接する（呂蒙伝）。

建安二十四年（二一九）、劉備から荊州を任されていた関羽が北上して襄樊を攻める。呂蒙は関羽が警戒を解くよう、病と称して建業に戻る。その際に孫権の怒りを買って左遷されていた虞翻を同道させる許可を得る。自分の後任には陸遜を推薦する（呂蒙伝・虞翻伝・陸遜伝）。

孫権は曹操と連合して関羽征討の兵を挙げると、呂蒙に対して孫堅の甥である孫皎と共に指揮を執るよう要請するが、呂蒙は「赤壁の戦い」の際に周瑜と程普の二人が指揮官となってうまくいかなかった事例を引き合いに出してこれを拒否。孫権は呂蒙に指揮を任せる。呂蒙は陸遜と共に先鋒となり、閏十月、兵を商人に変装させて公安を襲撃して士仁を捕らえ、

南郡太守・麋芳を降伏させる（呂蒙伝・呉主伝・孫皎伝・陸遜伝・虞翻伝）。

虞翻の進言により呂蒙は江陵に進駐して、関羽や将兵の家族を慰撫し、民家からの略奪を禁じる。呂蒙の配下に呂蒙と同じ汝南郡の者がおり、民家から笠を取って官から支給された鎧を覆った。

官の鎧は公のものとはいえ、それでも軍令を犯したのだから、同郷だからといって法を曲げてはいけないと呂蒙は考え、そこで涙を流してこの兵士を斬った。かくて軍中は恐れおののき、道に落ちている物も拾わなかった。呂蒙は朝夕に側近を遣って老人をいたわらせ、足りない物を問わせて、病人には医者や薬をあてがい、飢えて凍えている者には衣服や食料を与えた。関羽の蔵の財物・宝物は、いずれも封印して孫権の到着を待った。(7)

また、関羽から詰問の使者が来るたびにもてなして城内を見て回らせた（虞翻伝・呂蒙伝）。

これらの功績から呂蒙は南郡太守となり、孱陵侯に封ぜられたが、病を発して没した。享年四十二（呂蒙伝）。自らの後任には朱然を指名した（朱然伝）。

後に孫権は陸遜と周瑜・魯粛・呂蒙について論じ、呂蒙を周瑜に次ぎ、魯粛に勝ると評価している（呂蒙伝）。

三、『三国志平話』における呂蒙

『平話』(8)は宋元における民間の三国故事の一部始終を伝える貴重な文献であり、『演義』の前段階の作品としてその成立に大きな影響を与えた。しかし、こと呂蒙描写に関する限り、『平話』のそれと『演義』のそれとでは具体的描写に継承関係は見出し難い。そもそも『平話』において呂蒙が登場する場面は多くない。

最初に呂蒙が登場するのは、呉が劉備から「長沙四郡」を奪還しようとするエピソードである。魯粛は呂蒙に「長沙四郡」を奪還させようとするが、呂蒙は荊州の関羽を援護するために諸葛亮が引き連れて来た張飛・趙雲・馬超・黄忠に敗れ、やっとのことで逃げ帰る。その後、呂蒙は孫権に派遣された孫亮に従って再び諸葛亮と対陣するが、また敗れる（巻下第十葉裏）。このエピソードは前節で見た建安二十年に孫権が呂蒙に劉備から長沙・零陵・桂陽の三郡を奪い返すよう命じた一件に対応しているようであるが、正史の記載とは大きく異なる。

次に呂蒙が登場するのは、魏との関羽挟撃作戦である。呂蒙は張遼の要請により、魏軍と示し合わせて東南から荊州に攻め込んで関羽を挟撃する。関羽は荊州の東南で囲まれ、最後は天に帰す[9]（巻下第十三葉裏～第十四葉表）。

歴史上の呂蒙は呉の荊州奪取後すぐに没するが、『平話』ではその後、劉備が関羽の仇を討つべく呉に攻めて来た時にこれを元帥として迎え撃つ。劉備に挑戦状を送り、負けたふりをして誘い込んで大いに破り、さらに火攻めによって劉備を白帝城に追いやる。劉備の死後、諸葛亮は八陣図によって呂蒙を惑わし、劉備の亡骸を成都まで無事に運ぶ（巻下第十五葉表～第十六葉表）。正史・『演義』における陸遜の役割を『平話』では呂蒙が担っていることが分かる。民間の三国故事を史書に照らして修正した『演義』では、呂蒙を史実より長生きさせたり、陸遜の活躍を削ったりするわけにはいかなかったので、『平話』の筋立てをそのまま採用することはなかった。

このように『平話』の呂蒙描写は『演義』に直接の影響を与えてはいないといっていい。しかし、関羽のみならず、「夷陵の戦い」で劉備も破るなど、当時すでに崇拝の対象となっていた関羽を破った神をも畏れぬ所業により、劉備集団に敵対する悪役としての人物像が付与されている。この呂蒙の悪役化は『演義』に通じるものであろう。

四、『三国志演義』における呂蒙

本節では、まず『演義』[10]における呂蒙のエピソードについて、特に正史との違いに着目しながら確認した後、毛宗崗評において呂蒙がどのような評価を与えられているかを見ていきたい。

（一）『三国志演義』における呂蒙描写

『演義』において呂蒙の名が初めて見えるのは第三十八回。孫策の死後に孫権に仕えるようになった人物の名が列挙される中に呂蒙の名もある。したがって、正史に見えるそれ以前の呂蒙の事績については一切触れられない。

建安十三年（二〇八）に降服してきた甘寧を孫権に推薦したり、黄祖討伐で敵将を斬る活躍を見せたりしたことは『演義』にも見える（第三十八回）。同年の「赤壁の戦い」における呂蒙の具体的行動については正史に記されないが、『演義』では小説というジャンルの特性上、呂蒙が第四隊に任じられたとか、曹操の陣に火を放って曹操を追撃したものの張遼に阻まれたなどと具体的な行動が仮構されている。その後の南郡攻めについても「赤壁の戦い」と同様の描写のされ方がなされている（第四十四回・第四十九回～第五十一回）。一方、孫権に身を寄せた襲粛の兵を加えられることを固辞したエピソードが『演義』に描かれないことは先行研究でもすでに指摘していた通りである。[11]

周瑜が「途を仮りて虢を滅ぼす」計によって劉備から荊州を奪取しようとした時、呂蒙は淩統と共に後詰を務める（第五十六回）。「途を仮りて虢を滅ぼす」計自体が虚構であるから、この部分の呂蒙描写も虚構である。一方、呂蒙が孫権に勧められて学問に励むようになったことや、それによって周瑜の職を引き継いだ魯粛から認められるようになったエピソードについては、先行研究も指摘するように省略する。[12]また、呂蒙の近くに駐屯していた武将が死んだために孫権がそ

の兵を呂蒙に与えようとしたのを固辞したエピソードや、皖を襲撃して曹操軍の伍長を降服させたことにも触れない。

呂蒙が曹操軍に備えて濡須水の河口に塢を築くことを進言して孫権に採用されたことは正史にも見えるが、正史では建安十六年（二一一）のこととしているのに対し、『演義』では建安十七年のこととする。また、『演義』では建安十九年（二一四）に魯粛が関羽と単刀もて会談した際、甘寧と関羽を討ち果たす役を買って出たものの手を出せなかったことが描写される（第六十六回）。確かに呂蒙は魯粛を助けて益陽で関羽を防いでいるが、実際には関羽を討ち果たす作戦自体がなかったのだから、この描写は虚構である。しかも、実際に魯粛と関羽が会談したのは翌建安二十年のことである。同様に『演義』では建安二十年のこととされる皖城攻略での呂蒙の貢献も（第六十七回）、正史では建安十九年のこととなっている。このように出来事の起きた時間をずらすことは『演義』にしばしば見られることである。[13] 一方、孫権の命で廬陵の賊を平定したことや、益州を攻略した劉備から長沙・零陵・桂陽の荊州三郡を奪い取ったことは『演義』に描かれない。

孫権の皖城攻略を祝う宴席で遺恨のある淩統と甘寧が不穏な空気になったので、呂蒙が身をもって二人の間に割って入ったこと、「合肥の戦い」における戦いぶりなどは正史の記載を小説として敷衍している（第六十七回～第六十八回）。

正史では呂蒙は建安二十二年（二一七）に没した魯粛の兵馬を引き継ぎ、徐州よりも荊州を取るべきだと孫権に献策するが、『演義』では魯粛の死が直接は描かれず曹操への報告だけで済まされるため（第六十九回）、孫権への献策を建安二十四年（二一九）に移す（第七十五回）。建安二十四年は呂蒙が荊州を奪い、関羽を死に追いやる年であり、『演義』における呂蒙描写が最も多い。よって、荊州奪取の献策もこの年に移してエピソードの集中化を図り、話の流れを分かり易くしているものと思われる。

呂蒙が関羽を油断させるために病と称して陸遜と交代したり、孫皎と共同で荊州攻略の指揮を執ることを拒否したり、

兵を商人に変装させて荊州の烽火台を占拠したり、民家から笠を取った同郷の兵士を斬ったり、傅士仁・糜芳（正史ではそれぞれ士仁・糜芳）を投降させたり、関羽軍の留守家族や使者を厚遇したりする過程は基本的に正史の記載を敷衍する（第七十五回～第七十六回）。ただ、留守家族や使者の厚遇について、「これは奸賊の計だ（此奸賊之計也）」（第七十六回）と関羽に言わせているのは、後述のように、『演義』における呂蒙の位置づけを如実に示している。それは、麦城に入った関羽を捕らえる策を呂蒙が立て、その策によって関羽が捕らえられて殺されるという正史にはない虚構が設けられていることにも表れている（第七十六回～第七十七回）。『演義』が呂蒙を意識的に関羽と対置し、『平話』以上に関羽を殺した主犯として位置づけていることは間違いない。

だから、よく知られるように『演義』の呂蒙には正史とは異なる悲惨な死が待ち受けている。荊州奪取の祝賀の席上、孫権は呂蒙が周瑜・魯粛に勝ると評価するが、[14] 呂蒙に関羽の霊が乗り移り、孫権を突き倒して大喝した後、七穴から流血して死ぬ（第七十七回）。神格化されて信仰を集めていた関羽を死に追いやった極悪人に対する神罰として描かれていることは明らかである。

以上、『演義』の呂蒙描写を見てきた。麦城に籠る関羽を捕らえる策を立てたり、関羽に祟られて悲惨な死を遂げたりするあたりに、なるほど『平話』に見られた呂蒙の悪役化の影響が対関羽に特化した形で表れているといえる。一方、正史に見える呂蒙のエピソードの中で『演義』に採用されたものはその一部に過ぎない。「呉下の阿蒙」をはじめ、多くのエピソードが漏れている。これについて先行研究では、『演義』の作者が呂蒙の「義」を描きたくなかったからなどと説明しているが、[15] おそらくそうではあるまい。

井口千雪氏の研究によれば、『演義』は段階的に成立したという。まず、一般に羅貫中とされる作者が、『平話』やそれに準じる三国故事を題材にした作品を正史（裴注も含む）によって肉付けして発展させた。次に、それを手にした何者か

が『資治通鑑綱目』によってサブキャラクターのエピソードを増補。さらに、そこへ正史（裴注も含む）や『資治通鑑綱目』を用いて呉の人物に関するエピソードを挿入することで、現在のような形の『演義』が完成したという。後の段階で挿入された呉のエピソードとしては、『平話』に登場しない孫策の活躍のほか、「合肥の戦い」「濡須塢の戦い」、そしてそれらの戦いの中で繰り広げられる甘寧と淩統の物語が例として挙げられている。[16]

つまり、本来、『演義』には呉に関するエピソードが乏しかったということである。よって、正史の呂蒙関連エピソードの多くが『演義』に見出せないのも当然であり、それは呂蒙のキャラクター性とは無関係ということだ。「呉下の阿蒙」や呂蒙が降将の兵を与えられることを固辞したエピソードが『演義』に採り入れられなかったのは、作者の呂蒙に対する否定的感情ゆえではない。

そうなると、『演義』の呂蒙像を見る上で重視すべき核となる点は、やはり『平話』から受け継がれた劉備集団に敵対する悪役としての人物像であろう。井口氏の指摘からも、[17]『平話』の段階ですでに定まっている周瑜や魯粛の人物像は第一段階の『演義』にそのまま引き継がれていることが分かり、呂蒙についてもそれは当てはまるだろうからである。それは関帝信仰が最盛期を迎えた清代の毛宗崗本においても事情は同じであろう。

それでは、そこに描かれる呂蒙は、「三絶」の一人である義の化身にして圧倒的武勇を誇り、神格化もされていた関羽を倒すにふさわしいいかなる要素を持っているのか。それを明らかにするために、毛宗崗評にもそのヒントを求めてみよう。

（二）毛宗崗評に見る呂蒙像

呂蒙の名が見える毛宗崗評のうち、呂蒙の人物についての評で圧倒的に多いのは、呂蒙の「奸」や「不義」を指摘した

り、糾弾したりするものである。例えば、荊州を奪取した後、呂蒙が「軍中において一人でも妄りに人を殺したり、一つでも妄りに民間から物を奪ったりした者がいたら、必ず軍法に照らして処分する（軍中如有妄殺一人、妄取民間一物者、定按軍法）」と命を下し、さらに荊州の役人を元の職に留める処置を取った場面の評には、「これは呂蒙のよい点ではなく、正に奸なる点である（此非呂蒙好處、正是呂蒙奸處）」とある（第七十五回）。また、呂蒙が「荊州諸郡の全てにおいて関公に随って出征した将兵の家には、呉の兵が立ち入ることを許さず、毎月決まった穀物を支給する。病気の者がいれば、医師を派遣して治療させる（凡荊州諸郡有隨關公出征將士之家、不許吳兵攪擾、按月給與糧米。有患病者、遣醫治療）」と命令を出したので、「将兵の家ではその恩恵に感謝し、安堵して動揺することはなかった（將士之家感其恩惠、安堵不動）」という叙述に対しても、「呂蒙のよい点ではなく、まさに呂蒙の奸なる点である（不是呂蒙好處、正是呂蒙奸處）」と同様の評をつける（第七十六回）。呂蒙は将兵の家を労わるだけでなく、関羽の使者を厚遇するが、これらの行為については第七十六回の総評においても、「まさに極めて奸にしてずる賢い点である（正是極奸猾處）」と指弾される。いずれも呂蒙という人物が「奸」であることを強調する。[18] 荊州攻略を祝する宴席で孫権が呂蒙を周瑜・魯粛に勝ると褒め称える場面に対しては、「国賊を討つ義にくらいことは、呂蒙が（周瑜・魯粛の）二人に及ばないということであるから、どうして反対に彼らに勝るなどと言えるのか（昧討賊之義、是呂蒙不如二人、何得反曰勝之）」と孫権の評価に反対する。呂蒙の「不義」が非難されている（第七十七回）。

毛宗崗評では呂蒙を他の人物と対比させることもあるが、その場合、対比の相手は関羽が最も多い。[19] 第七十五回の総評には、「この巻は関公が病（毒矢に当たったことを指す）にありながら病でないようにしていることを描写したばかりのところへ、続けて呂蒙が病でないのに病であるように偽ったことを描写している（此卷方寫關公有病而如無病、便接寫呂蒙無病而詐有病）」とある。関羽と呂蒙が対比されると同時に、ここでもまた呂蒙の「奸」が指摘されている。同じく第

七十五回において呂蒙が関羽の設けた烽火台の存在に悩んで仮病を使った場面では、「関公は本当に病気なのに病気の様子はなく、呂蒙は仮病だから病気の様子はない。一方は神威には及ばないということであり、一方は悪賢さや偽りはおおい隠せないということである（關公眞病而無病色、呂蒙假病而無病色。一是神威莫及、一是奸僞難遮）」と評す。そして呂蒙と交代した陸遜がわざと下手に出た手紙を送り、関羽がそれにまんまと騙されると、「苦言は、薬であり。甘言は、病である。呂蒙の病が癒えて、関公の病が生じた（苦言、藥也。甘言、疾也。呂蒙之疾愈、關公之疾作也）」と評をつける。第七十六回の総評では、「関公は陽を用いるが、呂蒙は陰を用いる。関公は剛を用いるが、呂蒙は柔を用いる（關公用陽、而呂蒙用陰。關公用剛、而呂蒙用柔）」と言い、同じく第七十六回で呂蒙が関羽からの使者に丁寧に対応した場面には、「関公は『単刀会』では終始強硬な態度で接し、呂蒙はこの時には終始柔和な態度で接した（關公單刀赴會全用硬、呂蒙此時全用軟）」と、両者のやり方が正反対であることを述べる。

一方、毛宗崗評には呂蒙の有能さを評価するものもある。第六十一回では曹操軍の侵攻に備えて呂蒙が濡須に砦を築く提案をすると、「呂蒙は計略に長じているといえる（呂蒙可謂善計）」と評価する。第六十三回の総評には「呂蒙之多智」という文字が見える。第六十七回の総評では「戦争には速やかに攻めれば成功し、遅れれば失敗する場合がある（兵有速則得、遲則失者）」として、この回の呂蒙による皖城攻略をその例として挙げており、本文において呉軍が張遼の援軍が到着する前に皖城を取れたことに対しては「呂蒙の想定の範囲内（不出呂蒙所算）」と評する。第百八回の総評では「孫権が存命で、周瑜・魯粛・呂蒙・陸遜が没する前でも、やはりそうであったのに、孫亮の時代に、中原進出を図るとは、その困難さが分かるというものだ（在孫權未死、周瑜・魯肅・呂蒙・陸遜未亡之時、猶然如是、而乃欲於孫亮之日、進圖中原、吾知其難耳）」と述べており、呂蒙を周瑜らと並ぶ優れた大将と位置づけていることが分かる。

神格化され信仰を集めていた関羽を死に追いやった呂蒙に対する毛宗崗評はやはりその「奸」「不義」を強調するもの

が多い。それは『演義』が、『平話』において劉備集団に敵対する悪役としての人物像が固まっていた呂蒙を、史実に合わせて（「夷陵の戦い」の時に呂蒙はこの世にいないから）対劉備ではなく対関羽に特化した悪役に設定を調整したことと関係しているのは言を俟たない。毛宗崗評の中で呂蒙を関羽と対比して論評している例が他の人物との対比に比べて多いのもそのためである。

一方、呂蒙の有能ぶりを評価する評も見えるが、これらの評については慎重に扱うべきであろう。前述の通り、『演義』は段階的に成立し、呉に関するエピソードは後から追加されたと見られているからである。呂蒙の有能さを評価する毛宗崗評は、「合肥の戦い」「濡須塢の戦い」などの後から追加されたと思しいエピソードに関するものが目立つ。しかし、毛宗崗評がかかる『演義』の成立事情を踏まえているとは考えられない。よって、これら呂蒙を評価する評は本来の『演義』が志向する呂蒙像についての評とはいえない。

以上から、毛宗崗評において呂蒙は、関羽に対する敵役として明確に意識され、執拗にその「奸」と「不義」が強調され、また糾弾されているということがいえる。

おわりに

本稿は『演義』における呂蒙像を、呂蒙が神格化された関羽を死に追いやる人物としてどのように描かれているかという点に着目して、分析・検討した。『平話』の段階で呉において劉備集団に最も敵対する悪役としての地位を固めていた呂蒙は、歴史志向の『演義』においては対関羽に特化した悪役となった。そのことは毛宗崗評において呂蒙を他の人物と対比する際に関羽と対比している例が最も多いことにも表れている。一方、正史に見える呂蒙のエピソードのうち、『演義』から漏れているものが目立つのは、決して『演義』の作者が呂蒙を好意的に評価するエピソードを排除しようとした

からではなく、『演義』の段階的な成立（当初、『演義』には呉に関するエピソードは乏しかった）に起因する可能性が高いことも述べた。

では、『演義』の呂蒙は何をもって関羽を打ち倒すことができたのか。例えば、司馬懿や周瑜の場合、『演義』において諸葛亮のライバルとしてふさわしい人物に仕立てるために、彼らも優れた人物であることを強調する操作がなされている。司馬懿についていえば、「五路進攻策」（第八十五回）や謀反を疑われて失脚する話（第九十一回）は彼を強調するために挿入されたフィクションであるし、史実と違って諸葛亮の殆どの北伐で司馬懿が対峙することになっていたり、「街亭の戦い」（第九十五回）などで張郃の功が司馬懿の功とされたりしている。[20]『演義』の周瑜描写については、諸葛亮との絡みがない場面では周瑜が持ち上げられ、諸葛亮が絡んでくる場面では周瑜が貶められるという特徴がある。「赤壁の戦い」前夜、曹操が送り込んだ蔣幹を逆に利用する「群英会」では周瑜の智謀が際立てられるのに対し（第四十五回）、直後の「草船借箭」では周瑜は諸葛亮に子供のようにあしらわれている（第四十六回）。かかる描き分けをするのは、周瑜も優れた人物であることを示しておかないと諸葛亮のライバルとしてふさわしい存在にならないからである。[21]『演義』は、司馬懿も周瑜もどちらも優れているが、諸葛亮はさらに優れているということを強調する演出をしている。

しかし、呂蒙については司馬懿や周瑜のような演出は見られない。呂蒙の有能さを際立てているように見えるエピソードは、後から加えられたものであるか、あるいは毛宗崗評によって「奸」または「不義」と評されるように否定的に捉えるべきものとされている。先行研究には『演義』が呂蒙の「智」を強調していると論じるものもあったが、その説は当たらない。したがって、呂蒙は才能ではない別の要素によって関羽に対抗できる存在と位置づけられていることになる。

それを明らかにするために、『演義』の関羽像について確認しておきたい。『演義』で描かれる関羽の特色をまとめると、次の五点に集約される。[22]①義兄である劉備に対して忠を尽くす、②義を重んじる、③抜群の武勇、④他人に対して傲

慢、⑤女色を好まない。このうち、②の義を重んじる点が関羽というキャラクターを最も特徴づけていることは多くの論考が指摘するところであり、毛宗崗本の巻首に置かれた「読三国志法」でも関羽は諸葛亮・曹操と並ぶ「三絶」の一人に数えられていて、[23] しばしば「義絶」と称される。一方、『演義』の中では関羽とただならぬ縁で結ばれながらも悪玉として敵対するのが、やはり「三絶」の一人に数えられる曹操である。そして、この曹操について「読三国志法」は、「古今における奸雄の中で最も抜きん出た者（古今來奸雄中第一奇人）」と評し、その「奸」をキャラクターの特徴と位置づける。関羽の「義」の対極にあるのが曹操の「奸」である。

そして、呂蒙の行為や人物も毛宗崗評において「奸」、または関羽と真逆の「不義」と評されていた。つまり、呂蒙は曹操と同類の人物と位置づけられていることになる。『演義』において呂蒙が関羽を打ち倒すことができたのは、「奸」「不義」を通して曹操に連なる邪悪さゆえであった。『演義』における呂蒙が関羽を滅ぼす物語は、人間の負の面が正の面を圧倒する物語ということになる。

呂蒙が悪玉であることは改めていうまでもなく従来指摘されてきたことであるが、主観や印象のみで論じられてきた感があった。しかし、今回、『演義』の成立史や毛宗崗評、関羽との関係について踏まえることで、より具体的に『演義』が呂蒙像をどのように構築しているかを明らかにできたのではないだろうか。

尚、今回は毛宗崗本のみを使用したが、『演義』の成立史を踏まえて精確に呂蒙像を捉えようとするならば、他の版本についても目配りする必要がある。今後の課題としたい。

（注）

（1）中川諭「嘉靖本『三国志通俗演義』における『関羽の最期』の場面について」（『文化』五四―一・二、一九九〇年）参照。

(2) 趙永源「説呂蒙」、『鎮江師専学報』(社会科学版) 一九九三年第四期。
(3) 白盾「一時多少豪傑！――評《三国演義》東呉人物的描写」、『黄山高等専科学校学報』二〇〇一年第四期。
(4) 拙稿「『三国志演義』における周瑜像」(慶応義塾大学大学院文学研究科中国文学専攻修士論文)、一九九九年。
(5) 沈伯俊「智勇双全的呂蒙」、『沈伯俊説三国』中華書局、二〇〇五年。
(6) 本稿では、陳寿撰、陳乃乾校点『三国志』全五冊(中華書局、一九八二年版〔一九五九年初印〕)に拠った。ただし、句読点等の記号は改める場合がある。
(7) 官鎧雖公、蒙猶以爲犯軍令、不可以郷里故而廃法、遂垂涕斬之。於是軍中震慄、道不拾遺。蒙旦暮使親近存恤耆老、問所不足、疾病者給醫藥、飢寒者賜衣糧。羽府藏財寶、皆封閉以待權至。(呂蒙伝)
(8) 本稿では、国立公文書館内閣文庫蔵『全相平話』所収『至治新刊全相平話三国志』に拠った。
(9) 関帝信仰の影響により、関羽の死が直接には描かれない。
(10) 本稿では、羅貫中著、毛綸・毛宗崗評、劉世德・鄭銘点校『三国志演義』全三冊(中華版古典小説宝庫、中華書局、一九九五年)に拠った。ただし、引用にあたっては簡体字を繁体字に改め、句読点等の記号も改めた部分がある。
(11) 注(2)所掲趙氏論文。
(12) 注(2)所掲趙氏論文、注(3)所掲白氏論文。
(13) 例えば、諸葛亮が劉備に出仕したのを、正史では建安十二年(二〇七)とするが、『演義』では建安十三年とする。正史諸葛亮伝および『演義』第三十七回～第三十八回参照。
(14) 正史呂蒙伝に見える孫権が周瑜・魯粛・呂蒙について陸遜と論じた際の評価を下敷きにしている。
(15) 注(2)所掲趙氏論文。
(16) 井口千雪『三国志演義成立史の研究』(汲古書院、二〇一六年)の「第五章　執筆プロセスに関わる考察」。
(17) 注(16)所掲井口氏著書三八四頁。
(18) このほかに第七十六回では、呂蒙が関羽の使者をもてなしたことに対して「悪極」と評し、荊州の出征将兵の家族が自分たちの無事や衣食が足りていることを手紙等でその使者に伝えてもらおうとする場面や、それを聞いた将兵が安心して戦意をなくす場面、関羽軍から逃亡した荊州の兵士がまだ従軍している家族に投降を呼びかける場面において、畳みかけるようにそれぞれ「皆

在呂蒙術中」「俱在呂蒙術中」「皆在呂蒙術中」と評をつける。これらも呂蒙の「奸」を強調する評といえよう。

(19) 関羽と対比した評は五例ある。他は周瑜二例、魯粛二例、諸葛亮一例、陸遜一例、郭嘉一例、曹洪一例、張遼一例、周善一例、傅士仁一例、曹操一例。

(20) 竹内真彦「司馬懿像について――正史から演義へ――」(『未名』十三、一九九五年)。

(21) 注(4)所掲拙稿。尚、「赤壁の戦い」は『演義』成立以前から基本的なストーリーが出来上がっていた部分であり、物語の本筋として第一段階の『演義』にすでにあった。そこに関わる主要な人物像もこの段階ですでに定まっていた。注(16)所掲井口氏著書三八四頁参照。

(22) 拙稿「関羽と貂蟬」(『日本中国学会報』第五十六集、二〇〇四年)参照。尚、これまで多くの研究者が『演義』における関羽像についての論考を発表している。ここでは紙幅の関係で代表的なものを挙げるにとどむ。董毎戡『三国演義試論』(上海古典文学出版社、一九五六年)七〇～八一頁、李希凡「略論『三国演義』里的関羽的形象」(『文芸報』一九五九年第十七期)、剣鋒「『三国演義』如何塑造関羽的芸術形象」(『海南師専学報』一九八二年第二期)、周兆新『三国演義考評』(北京大学出版社、一九九〇年)一六二～一七六頁、井波律子『三国志演義』(岩波新書、岩波書店、一九九四年)八五～一一三頁、沈伯俊「民族文化孕育的忠義英雄――論関羽形象」(『西南交通大学学報』社会科学版、二〇〇五年第四期)、仙石知子「毛宗崗本『三国志演義』に描かれた関羽の義」(『東方学』第百二十六輯、二〇一三年。のち仙石知子『毛宗崗批評「三国志演義」の研究』汲古書院、二〇一七年)。

(23) 「読三国志法」に、「吾以爲三國有三奇、可稱三絶。諸葛孔明一絶也、關雲長一絶也、曹操亦一絶也」とある。

【付記一】本稿は、筆者が担当するゼミナールの履修者のために卒業論文の見本として作成したものである。

【付記二】本稿の執筆中に、本稿でもその論考を参照させていただいた沈伯俊氏の訃報に接した。沈氏は筆者の留学中の恩師であり、二〇一五年に来日された際には筆者担当ゼミナールの学生をご指導いただいたこともある(伊藤晋太郎ゼミナール「沈伯俊氏が語る『三国志』――人物と創作方法――」(『二松學舍大学人文論叢』第九十七輯、二〇一六年)参照)。沈氏のご冥福を衷心より祈ると共に、その学恩に対して心からの感謝を申し上げる。